

ニカーヤにおける八聖道と十無学法

Thanavuddho BHIKKHU

八聖道は原始仏教の修行道の中でもっとも重要視されるものであると言っても過言ではない。釈尊の最初の説法であるといわれる「初転法輪経」においても、八聖道は解脱への道として説かれていた。

しかし、C.A.F. Rhys Davids が既に指摘しているように、*Anguttara-nikāya* の中には八聖道は二回しか述べられていないのに対して、十無学法は少なくとも五十四回説かれている。R. Bucknell は、これは十無学法の方が八聖道より上位の修行道であることを示唆していると考えている。そして氏は、八聖道は不完全な修行道ではないかと考えているようである¹⁾。八聖道と十無学法との関係を明らかにすることが本論文の目的である。

この十無学法 (*asekhadhamma*) の内容は八聖道の八支の次に正智 (*sammāñāṇa*) と正解脱 (*sammāvimutti*) が加えられて十支となる。

『増支部経典』には以下のような比丘と釈尊との問答が見られる。

(比丘)「大徳よ、無学、無学と呼ぶのは、大徳よ、如何にして比丘は無学になるのか」と。

(釈尊)「比丘よ、ここに、比丘は無学の正見を具足し、無学の正思惟を具足し、無学の正語を具足し、無学の正業を具足し、無学の正命を具足し、無学の正精進を具足し、無学の正念を具足し、無学の正定を具足し、無学の正智を具足し、無学の正解脱を具足する。

比丘よ、このように比丘は無学になる」と。(AN5, p.221)

そして、『相应部経典』には次のようなある比丘と釈尊との問答が見られる。

(比丘)「大徳よ、有学、有学と呼ぶのは、大徳よ、如何にして有学になるのか」と。

(釈尊)「比丘よ、ここに、有学の正見を具足し、…中略…、有学の正定を具足する。

比丘よ、このようにして有学になる」と。(SN5, p.14)

この二つの経典を見れば、明らかに八聖道は有学と無学の二種に分けられ、有学は有学の八聖道を具足し、無学は無学の八聖道と無学の正智・正解脱を具足する。有学の正智と正解脱があるかどうかという点について、更に考察してみたい。

有学の解釈は『人施設論』第一章「一人」には次のように述べられている。

「いずれが有学者であるのか。

四つの道を具する者と三つの果を具する者は有学者である。阿羅漢は無学である。残余の者は非有学非無学である。」(Pug, p. 14)

有学は明らかに預流向・預流果・一來向・一來果・不還向・不還果・阿羅漢向を指している。そして、無学は阿羅漢を意味するのである。

『相應部經典』「大篇」第十一 預流相應, 第三 百手品, 第六 破戒經(一)の要点を集めて記せば次のようになる。

舍利弗は Anāthapiṇḍika 居士を見舞いに行き, Anāthapiṇḍika 居士は邪見乃至邪解脱を持たず, 正見乃至正解脱を持つということを説く。阿難はこれを世尊に伝え, 世尊は, 舍利弗は四預流支を十相に分別すると説く。(SN5, pp. 380-385)

Anāthapiṇḍika 居士は預流果を得た者であるから, 明らかに預流者の正智・正解脱もあるのである。阿羅漢と預流者の正智・正解脱があるなら, 一來者と不還者の正智・正解脱もあると考えられる。

又、『流相應部經典』に, 釈尊は次のように述べている。

比丘たちよ, 如何なるものが梵行であるのか。これは八聖道であり, 即ち正見乃至正定である。比丘たちよ, これが梵行と呼ばれる。

比丘たちよ, 如何なるものが梵行果であるのか, 預流果・一來果・不還果・阿羅漢果, これらが, 比丘たちよ, 梵行果と呼ばれる。(SN5, p. 26)

この經典によれば八聖道の修習によって四果が得られることは明らかである。では, 次に四果の各果を齎す八聖道は, 同じものであるか, あるいは別のものであるかという問題が起こる。

正見の場合を考えてみれば, 預流者は十結 (saṃyojana) の中の有身見・疑惑・戒禁取を断除することができるが, 残りの欲貪・瞋恚・色貪・無色貪・慢・掉挙・無明を断除することはまだできない。四聖諦の智を正見の内容とすると, 四聖諦の三転十二行相が四聖諦の完全な智であり, 預流者は未だこの完全な四聖諦の智を持っていない。なぜなら, 集諦の智の場合は, 苦の原因である愛, つまり煩惱を完全に断除することがまだできないから, 集諦の第三転の智, つまり苦の原因である愛を完全に断除する智が具わっているとは言えないからである。

一來者は, 預流者と同じく最初の三結を断除し, 貪・瞋・痴が預流者よりも少なくなるだけであるから, 預流者より智のレベルが一段高くなっているが, まだ完全な四聖諦の智を持っていない。

不還者の場合は十結のうち, 五下分結を断除することができるが, 五上分結は

まだ断除されないから、不還者の四聖諦の智もまた一來者より一段高くなっているが、まだ完全なものではない。

阿羅漢の場合のみが完全に十結及び全ての煩惱を断除することができるため、完全な四聖諦の智、つまり正見を具する。八聖道の他の道支もまた同様である。

阿羅漢向と阿羅漢果の八聖道は同じものであるかどうかという問題については、阿羅漢向は有学に属し、阿羅漢果は無学そのものであるから、当然、阿羅漢向の八聖道は有学の八聖道である。この阿羅漢向の八聖道の修習によって、阿羅漢果の八聖道、つまり無学の八聖道及び無学の正智・正解脱が得られ、十無学法が具足される。この十無学法は阿羅漢（阿羅漢果を得た者）の功德にもなるのである。不還向と不還果の八聖道、一來向と一來果の八聖道、預流向と預流果との八聖道も、阿羅漢向と阿羅漢果の八聖道の場合と同様に微妙に異なることが考えられる。

そして、『相应部经典』に、預流者は八聖道を具足する者であるという釈尊と舍利弗との問答が見られる。(SN5, p. 348)

以上に述べられた諸經典を見ると、明らかに八聖道は修行道であると同時に七種の有学の功德にもなる。これに対して十無学法は修行道ではなく、目標そのものであって阿羅漢の功德である。このために四聖諦の道諦は十無学法ではなく八聖道であると言われる。なぜなら十無学法は道諦ではなく、道諦の目標である滅諦を意味するからである。このため、八聖道は道 (maggā) や行道 (paṭipadā) や乗物 (yāna) などと呼ばれるのに対して、十無学法は彼岸 (pārimatira) あるいは涅槃そのものであると言われるのである。八聖道を具足すると言える者は預流向以上の聖者である。聖・無漏の八聖道というのはこの預流向以上の八聖道を意味し、一般に八聖道をいう場合はこの聖・無漏の八聖道を指すのである。この八聖道を繰り返して修習することによってより上位の有学の境位が得られ、最終的には目標である十無学法、つまり阿羅漢・涅槃に到達する。手段である八聖道は無学の正智・正解脱を齎し、自己も無学の八聖道となつて、全部合わせて十無学法、つまり目標そのものになるのである。

-
- 1) R. Bucknell, 'The Buddhist Path to Liberation; An Analysis of the Listing of Stage', The Journal of the International Association of Buddhist Studies, vol. 7, no. 2, 1984, pp. 8-10.

〈キーワード〉 八聖道, 十無学法, 初期仏教の修行道

(東京大学大学院)